

うまい肥後米を作って欲しい……

米が余っているのに、うまい米が食べられない……これが消費者の不満です。ことに大阪は地理的な関係もあって、北海道の米から九州の米まで、いろとりどりに入っているためか、配給のたびに味や形の違う米が配られることが多いようです。

そのうえ、昨年は、異臭米や、くだけ米など、米としては完全に失格である米でない米まで喰わせる有様で、これでは米の消費が減ってゆくのも当然だと思いま

お答え

「うまい米づくり運動」で品質改善へ

★ 県政なんでも相談室

「肥後米の味がなつかしい」と言われるあなたの言葉に、私たちはまず強い責任を感じます。ご承知のように統制がなかった戦前の米は、産地によって、また品種によって、うまい米、ま

東区の大坂会館で開催しましたが、肥後米はうまい、もっとたくさん送ってくれ……という意見が多かったので、県側としては安緒の胸をなでた次第です。というのは、量さえとれば良い

の制度がきっかけになって産地や品種による銘柄の考え方が、次第に強くなることでしよう。したがって「肥後米の評判を聞く

相談

従業員住宅を建てたいが……

中小企業の経営者ですが、近年経済の高度成長に伴って、私の企業も予想外に順調な歩みを経て、企業収益も伸びております。経営の技術・設備の合理化・近代化を図り、さらに将来の飛躍発展を期さなくてはなりません

お答え

いろいろある融資・分譲制度

政府施策による従業員住宅は、お説のとおりかなり複雑なものとなっております。これは戦後の住宅不足に対応して、そのときどきの要請に応じ、い

幸に本県の産米は、品質の面では伝統的な強みを持っており、また量の面では、約二十万トンを超えて移出する力を持っており、近畿以西の県ではありまじきまで、品質と量の両面で大坂市場に対する力が発揮できると考

生施設の充実が必要であることが痛感されます。つきましては、貸付利率が低利で償還期限も比較的長期である政府資金を

わたっています。従業員住宅融資・分譲制度もこのようない関係で種々あり、それぞれ特長があります。建設する住宅の規模・資金

南関町

スポーツで健康な部落づくり

南関町の東豊永(百七十世帯)と松尾(三十六世帯)の両地区では、スポーツで、明るく健康なみんなの部落をつくらうと、このほど、それぞれ区民体育祭を開催した。

東豊永地区は当初ソフトボールも予定していたが、雨天のため、バレーボール大会を町立南中学校体育館で行ない、五つの部落から男女二組のチームを編成して対抗試合となった。

小部落の組合長をリーダーとして、各選手は五色に色分けした鉢巻きをしめ、プラカードを先頭に入場、会長(区長)のあいさつ、選手宣誓など県体そっくりの開会式で幕を開けた。

競技は各選手の懸命な頑張りで区民やつめかけた観衆から声援がとび、われんばかりの賑かさだだった。中には日頃なれないボール扱いに珍ゲームもみられ、つづみ太鼓の成援も一緒になって会場をわかせた。

競技終了後、優勝チームには、手づくりの優勝旗、そして参加者にも、ささやかではあるが区の貯金をさいて賞品や賞金が贈られた。

福山会長(区長)は「日常の激しい農作業から解放されて、区民がそろって、笑顔で楽しい一日を過ごせることは意義深い。農村に若々しい空気を溢らせるにはスポーツが一番です。区の総会で年に春秋二回行なうよう決まったので、今後も続けていきたい。」と語った。

また、松尾区では、町立北中体育館で、子どもの日の行事もかねて、親子対抗のドッチボールを初め、歌やゲームの

楽しいレクリエーションで一日を送った。

町の教育委員会では、バレーボールやソフトボールなどのように、ごく親しみやすいスポーツを通して、農村での体力づくりは推進されるし、スポーツの振興やレクリエーションの普及にも大いに役立つ、このような各地域の特性や実情に即した体育をこれから積極的に進めていきたいといっている。

田浦町

甘夏づくりと入づくりと

わが田浦町は、数年前までは「陸の孤島」と呼ばれていたが三号線の完全舗装により、ようやく近代化の恩恵に浴するようになった。加うるにわが町は、海洋性気候で海岸一帯は殆んど無霜地帯であり、自然的条件に恵まれている。

このような立地条件と研究熱心な先覚者達の努力、地域住民の旺盛な栽培熱、適確な当局の指導が今日量、質共に日本一を誇る甘夏王

名で発足した甘夏栽培も、町の基幹作物として取り上げられるにいたり、数次にわたる農業構造改善事業による土地基盤整備事業や、近代化事業等、町の行政指導と相俟って、急速に発展し、今日に於ては二百七十ヘクタール、三千三百ト、三億三千万円(昭和四十二年産)に達するまでに成長し、当町の主要産業となっている。

町から・村から

電力事業の有利性によって、誘致された、日本有数の電機メーカー、東電電極は、その主力工場を田浦町におき、製品

の大半を輸出し、外貨獲得に役かかっており、傘下関連工場とともに、田浦町の発展の一翼をなっており、田浦町は又電機とともに繁栄してゆく町でもある。

ところで、最近の人口減退は特にはげしいものがあり、若い人の都市流出は、農村における後継者育成の問題までも引きおこしているが、わが町に於てもやは

りその例にもれず、年々児童数は減少の一途をたどっており、山間部において特にいじりしいものがある。その結果学校の統廃合問題が上ってくるが、この四月より横居木分校を廃校して本校に統合、児童はスクールバスによって、約六キロメートルを通学している。四十数名の小規模校を廃して、より高い次元の教育環境のもとで学習させたいとの意向でふみきったものである。

竜ヶ岳町

樋島架橋着工

神々が島を太綱でゆわいつけて、曳き寄せる国づくりお伽話があった。三月十八日、寺本知事が、にこやかな

恵比須願で、樋島架橋起工式の納入をされた。神々の太い手綱に代わり、若戸大橋と同型の近代科学の粋を集めた、長さ百五十メートルの白亜のつり橋が現実となったのである。

町は喜びに溢れ、爆竹が鳴り、離島の桎梏から解放される町民の胸は風船のようにふくらんだ。宿命だと諦め、不可能だと考えられていたことを可能にしたものは何か。感激にむせんだ辻本町長は、県内外からの列席者に対して町重なる謝辞を述べるとともに、しきりに町民の「大和一心」を説いた。

むべなるかなである。そして現実には、その目と皮膚で、架橋を確めた町民の与論は、統合中学の位置決めにも、微妙な変化をもたらしたのである。

統中の前提条件は、旧三村地域の一体化、いかなれば、架橋によって樋島を結び、陸続きにすることであった。その後、統中促進協に対する町民の関心は、空前の盛り上がりを見せもはや、早急なる歩み寄りが期待され、近日中により結論が出される空気が強い。地方自治体では、重点課題の一つが解決されると、これが誘い水となって、解決に難と考えられるものでもスムーズに好転する場面が多い。